

平成 27 年度九州がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン

第 3 回九州がんプロ全体研修会

2016 年 1 月 30 日～31 日の二日間、指宿ベイテラス HOTEL & SPA にて研修会が開催された。長崎大学からは教員 3 名と大学院生 1 名が参加。私は初めてこの会に参加したが、今回のプログラムは通常の研修会に加え、メディポリス国際陽子線治療センターの見学会が含まれていた。

朝、長崎を出発して新鳥栖で新幹線に乗り換えて鹿児島に到着、鹿児島中央駅までマイクロバスの迎えがあり、2 時頃には現地に到着した。

鹿児島大学上野先生のご挨拶(写真 1)で会はスタート。

【1 日目】



研修会はグループ学習の形をとっており、まず、簡単なオリエンテーションを経て、他己紹介を。私の班は医師 2 名（私と乳腺外科医の女性）、薬学部大学院生、看護師の 4 名で構成されていた。

症例検討は 2 例用意されており、甲状腺癌の再発症例と進行肺癌の症例。我々の班に与えられた症例は九大の在田先生から提示(写真 2)された甲状腺癌再発の症例であった。



我々のグループ 4 名はいずれも甲状腺癌の治療に普段携わることが少なかったが、ガイドラインなども参考として、意見を出していった。考えられる方針として手術、放射線ヨード治療、外照射、分子標的薬などがあげられた。それぞれの治療について利点、欠点をあげていき、概ね在田先生の求める回答が出せたが、その後症例についての解説がなされた。また、次なる問いとして咽喉頭全摘患者を通院で投薬治療する際の安全管理と在宅療養計画が出題された。これについては、日曜日に発表することとなる。

もう一問の肺癌症例は長崎大学福田先生の提示(写真 3)。



右上葉近位側に生じた扁平上皮癌で右上葉末梢は無気肺を生じており、病変が右主肺動脈に浸潤。リンパ節腫大も N2 で IIIb として治療方針を考えさせるものであった。長崎大学から大学院生として参加した中村君が班の発表者として意見を述べた(写真 4)。



また、次なる質問としては肺動脈浸潤をなしとして IIIa としての治療方針を考えさせ、放射線科化学療法、術後放射線療法、放射線化学療法と手術の組み合わせなどについて、これまでの治験からミニレクチャーがなされた。

温泉に入った後に夕食、席は自由であったが私のテーブルは私以外皆九大の医師で九大の放射線治療医、外科医等と話げできた。食事も良かった。

食後も温泉に入り、その後一室に集まり 2 次会。研修会から一貫して、様々な診療科、看護師、薬剤師など垣根を越えた交流は有用であった。

【二日目】

快晴(写真 5)。



まず症例の続きの質問についてだが、甲状腺癌再発、咽喉頭食道摘出後、独居の男性についての在宅療養の歳に検討すべき事として、安否の確認、緊急時の連絡法、有害事象への対応、日常診療への支援などを中心に様沢なディスカッションがなされ、在田先生からのレクチャーもなされた。

最後にメディポリス国際陽子線治療センターの有村先生から陽子線治療についての説明(写真 6)と施設見学(写真 7)がなされた。



説明の後には、参加者から実際の治療に至るまでの流れ、治療にかかる時間、今後の陽子線の発展などについて、様々な質問もなされた。陽子線治療は、放射線治療よりも選択的な線量分布により有効性が示唆されている。最近小児の固形癌に保険適応となり、それ以外は先進医療で、現時点では 300 万円という高額な負担、かつ施設にかかるお金はかなりのものである。有村先生からの控えめながらも、種々の疾患、特に最近では乳癌への取り組みなどについて、様々な工夫をされている話を聞くことができた。

全体写真(写真 8)



撮影後、長崎大学芦澤先生より閉会の話がなされた(写真 9)。



会全体を通して、九大、長崎大、鹿児島大、宮崎大、琉球大と様々な施設、かつコ・メディカルも含めた会での討論会、懇親会で知識とともに交流を深めることができ有意義な2日間であった。

長崎大学 臨床腫瘍学 林 秀行